

の「ア〜ア〜」を発声しながら、動物をみて歩くこと、お辨当をたべるのに、出来かけの動物たちと同じわらの上に坐るのを許したことなくでした。子どもたちにとってはそのだけで十分だったことと思います。子どもの内にひそんでいたエネルギーをこちらで気づき、それを引き出させてあげた喜びをもって力一杯自分の能力を活用させている子どもたちの姿をみておりました。そして私にも新しい自信を子どもたちは与えてくれました。

× × × × × × × ×

ここにいる動物たち、広いジャングルに解放されて生き生きとしている動物たち。子どもと教師の協力がこの動物たちの生きた表情を作り、血をかよわせ命をつくったのだと強く思いました。

もし計画案に忠実に柵に囲われた動物園を作っていたならば、きっとこのように活発な子どもたちの動きは見られなかったでしょう。そしてこの動物たちの表情も……

私はこの経験を通して「子どもへの教師の協力」ということについて更に思いを強くしました。それは子どもの心を知ること。「子どもは希望と夢に生き、そしてたえず自分自身をのりこえて生きつづけていく唯一の存在」ということを理解し、子どもの内部にあるものを自由に発揮出来るようにしむけてあげることだと。そしてわれわれ

おとなもそのような子ども心に勇気づけられて、たえず自分をのり越えていく生き方を子どもから学びとることだと。このような子どもとおとなの協力があつてこそ、子どもは伸びのびと、おとなは若々しくこの世の中を生きて、お互いの幸福をつかむことが出来るのだと思います。

(東京・小川幼稚園)

Hちゃんの「キテル」



白 井 素 子

四月に入園後十月の中頃まで一言も口をきかなかつたHの口から「キテル」ということばがとび出すまで、六か月ものあいだ同じクラスの子どもたちのたくまない協力で担任教師の私は、実は、子どもにはげまされてこの子の指導をしてきたようにさえ

反省される。主役は子どもたちであり、私は脇役なのだ。それにしても子どもたちの自然にやわらかい心には、ただ、頭が下る思いであり、新米教師の私にとってこのHの指導経験は、またと得がたい大きな勉強であった。「子どもたちは主役、教師の私

は脇から協力して」この心構えを私はしみじみと胸にしまめてこのさざやかな記録をつづっている。

Hは入園後ずっといつも同じ場所の窓わくにもたれて、他の子の遊んでいる姿をじっとみつめ、戸外に子ども姿が見られなくなり、自分の組で友だちが活動を始める様子を感じてもやはり、ただ、お庭を見つめている。あの空間をみつめているのは一体何を考えているのだろうか、早く皆と一しょに遊びたいという気持もあるのかしら、行動に移せないだけなのかしら、それともHにとっては友だち遊びに参加することがこわいのかしら、と、いろいろ考えた。この様子では一斉保育する場合はなおのこと参加しにくいだろうと思いたびたび自由保育も試みたがHの態度には大差がない。はじめ子どもたちはかわるがわるHの手をとり席につれていった。が、度重なるといやになつたのだろう、七月の終り頃は、見捨てられた具合になった。すると彼は、毎朝泣

いて自分の存在を示し始めた。ある日「ナンデHチャンヨクナクノ」「Hチャンナカントジブンノイヌニスワッタライノニ」「マク、テヒイテスワラシタゲヨウカ、ホツテオコウカ」などと口々に言っていたが、子どもたちがどのようにするだろうとじっと見ていた。すると世話好きの男の子が手をひいて椅子にすわらせようと骨をおっているが、Hはそれでも動くものかとはかり顔を真っ赤にして泣き、しゃがんでしまった。つい私は、「Hちゃんどうして席にすわらないの、せつかく手をひいてくれたのに」と言ってしまった。しまった、と後悔したがおそかった。その後私の顔を見ると目をそらし、上目を使って逃げるのだった。夏休み前なので、整理のしごとが忙しく私のHに対する注意も、知らず知らずになくなっていったとみえる。彼の上目使いがますますひどくなった。教師の私自身の忍耐力も少々ぐらついてきて他の子は出来るのに、と、個人的な発達の度合も考えてや

らず心中ひそかに思うことも多くなった。この私の心を反映してか鼻汁を出して泣きじっと立っている彼の姿を見て、子どもたちのあいだでもいやな子だ、じゃまっけた、という取扱いが見受けられ、この状態が九月に入っても続いていたのだ。なんとかこの子を皆と同じにしたいと思い、いろいろ計画したが、いっこうに効果が現われず、感情を伴わずに速効を求める自分のあさはかさが身にしみて思われるばかりだった。Hが欠席した時のことである。組中の子どもは「キョウはHチャンキテヘンヨツテナカンデイイワ」「テヲヒイテヤランデモイイモン、ウレシイ」「アソンデヤロトイワンデモイイナ」と口々に言っている。こんなにHに関心が向けられているのなら、この子どもたちの気持をよい方に向けたらどんなにいいだろうと思ひ、Hの様子をおもしろいお話に作り、このようなお友だちは、どうしてあげたらよいだろうと話しかけた。泣いて椅子にすわらない子をどうし

ようか、とか皆でどんなにしてあげたらよいか、など話合っているうちに「Hチャンミタイ」という声が耳にとまった。翌日、Hが来ると子どもたちは「Hチャンオイデアソソデアゲル」とHをひっぱった。Hの方では、一週間以上も、首をふっていたが、毎日まいにちの子どもたちのさいそくにつられ九月の中頃から少しずつ遊びの仲間に入り始め、十月の初めの運動会は喜んで参加した。運動会后、機会を見つけて「Hチャンハシリッコハヤカッタ」「サンリンシャニジョウズニノッタ」とかの子どもたちの声を特に取り上げて手を叩き、皆でほめてあげた。その数日後から自分で席にいき、少しずつ口をばくばくさせ歌を小声で歌っている様子である。そんなある日のお昼休みに、小声で歌い出したかと思うと急に大きい声で歌った。ことばも、ふしも正確に歌えるのである。ああ、やっと普通の子と変わりなく歌っている。もう一息だ。毎日まいにち機会のあるごとに、「お兄ちゃ

んどうしてるの」(年長組に在園中)「お母ちゃん今何してるかな」とか、毎日家庭の様子を質問してみた。ある日、「お兄ちゃんはお休みしているの」ときいた時、小さい弱い声で、「キテル」と返事した。そばで聞いていた子どもが「アッ、Hチャンがキテルトイッタ Hチャンがキテルトイッタ」と手を叩き喜んだ。これがぎっかけでだんだんと口をきくようになり、「センセイボクノイストコニアルノ」「ドコニス

ワルノ」とか少しずつ質問をはじめた。この調子をこじらせてはと思い、席の移動もなくし、劇遊びにひき入れた。「ボク犬ニナリタイ」「ワン ワン ワン」と、おおはしゃぎの毎日を送っている。

他の子どもたちもHに対して特別な関心を示さなくなったが、Hはもう後戻りしないだろう。今、クラス中の子どもたちと私とびったり気持の会った毎日を送っている。

(和歌山・日前幼稚園)

幼児とのこの頃



忍田晶子

○うた

「先生、朝顔三つ咲いているわよ。おへやの前に子どもたちと播いた朝顔が咲いている。それを見て私に知らせてくれた。」「あ

らほんと、きれいなね。何色かしら。」「赤と青。」「そうね。」「あつ、先生なに。なんか虫がいる。」「どれ、あら蜂さんよ。きつと甘い蜜をすいに来たのよ。蜂のお歌知